

「伊勢原町家屋名入地図」と可児正弘について

渡辺 真治

はじめに

まずは今回採り上げる資料の表紙写真を掲げよう。

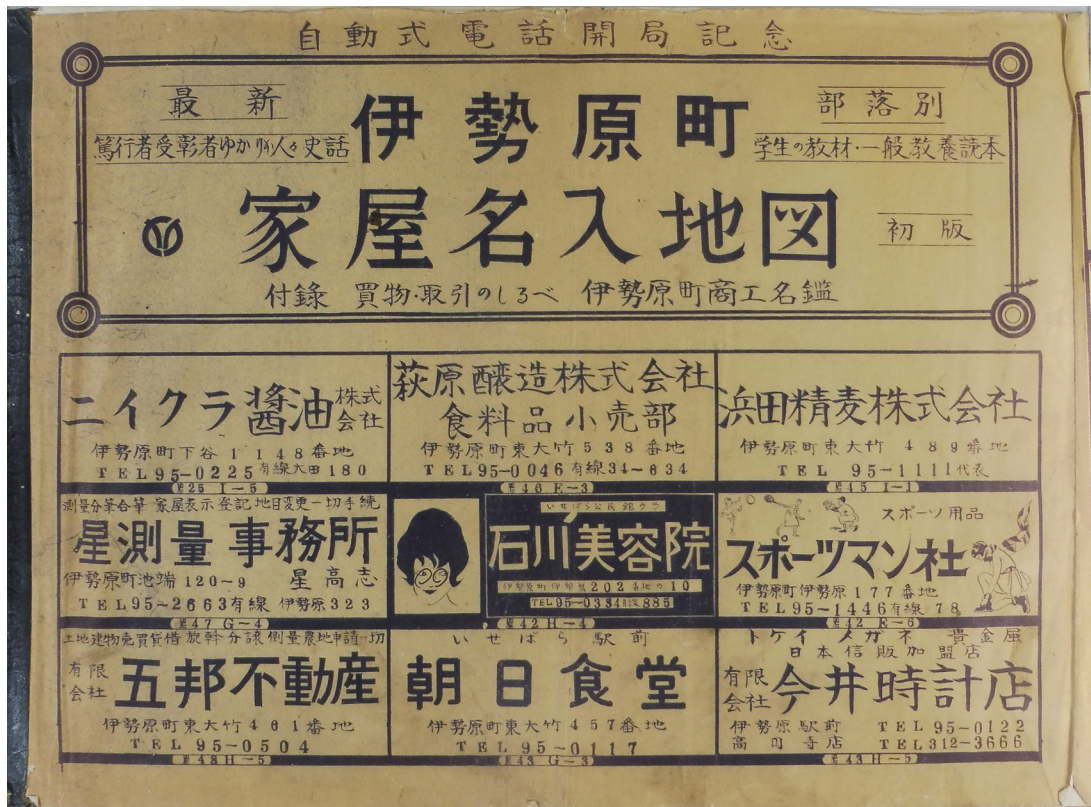


写真 1 1 頁目(資料表紙)

「伊勢原町家屋名入地図」と言い、筆者の家にて「発見」された、今から半世紀以上前に作成された住宅地図の一種である。おそらく一定数が世に出回り、今なおかなりの数が現存すると思われるので⁽¹⁾ 仰々しい物言いは気恥ずかしいが、寡聞にして類例をあまり見ないため資料とその作成者について調査した内容を公表する次第である。

1 資料の概要

A 3判 2枚を横長に繋いだサイズ用の紙にA 3判を2面ずつ印刷した全49枚を半分に折りホチキス留めで袋綴じにし、綴じ部には製本テープを貼るという極めて簡易な製本形式である。

表紙には「最新部落別 伊勢原町家屋名入地図 初版」とのタイトルが大書されると共に、「篤行者受賞者ゆかりの人々史話」「学生の教材・一般教養読本」「付録 買物・取引のしるべ 伊勢原町商工名鑑」といった謳い文句が掲げられている。

全体で98頁⁽²⁾を数える大部だが、このうちいわゆる地図の部分は1～66頁目である。

表紙に続いて2頁目からは索引類が商工名鑑と題された広告頁を織り交ぜながら記される。7頁目には商工名鑑(賛助商社一覧表)として土木建築・不動産・家具・食品・精麦等々といった業態毎に事業者名と電話番号のリストが付されている⁽³⁾。

そして11頁目からがいよいよ地図の頁になる。地図の頁に関しては縦軸に1～7の数字、横軸にA～Jのアルファベットが振られた中に道路や建物の配置が描かれる⁽⁴⁾。建物には世帯主や事業者の名称が示されており、いわゆる住宅地図の一種とすることが出来よう。但し地図の基本である縮尺や方角についてはかなり自由、というよりはほぼ無視されていると言って良い。例えるならば自宅から最寄り駅までの経路を書けと言われて地図などを参照せずにフリーハンドで書いたものに印象が近いと言えよう。

ただこのことは家屋名入地図の欠点というよりはむしろ特色と捉えるべきであろう。なんとなればその記載内容は、当時の人々の道路網や家並みの認識のしかたが反映されていると思われるからである。

写真2の「No28下大竹」は筆者の自宅がある伊勢原市下大竹地区の頁であるが、E欄の部分縦走しているのが神奈川県道61号平塚伊勢原線である。実際にはこのような直線道路ではなく、かなり蛇行しているのだが、「平塚線(県道61号の伊勢原での通称)が南北に走り、そこから枝道が分岐する」

というのは現在も変わらぬ地域の住民に共通する道路網の把握のしかただと思ふ。道路の太さや土地の広狭も含めて、実測図には現れない、住民の観念的とでも言うべき地図把握のようすが見て取れるようで興味深い。

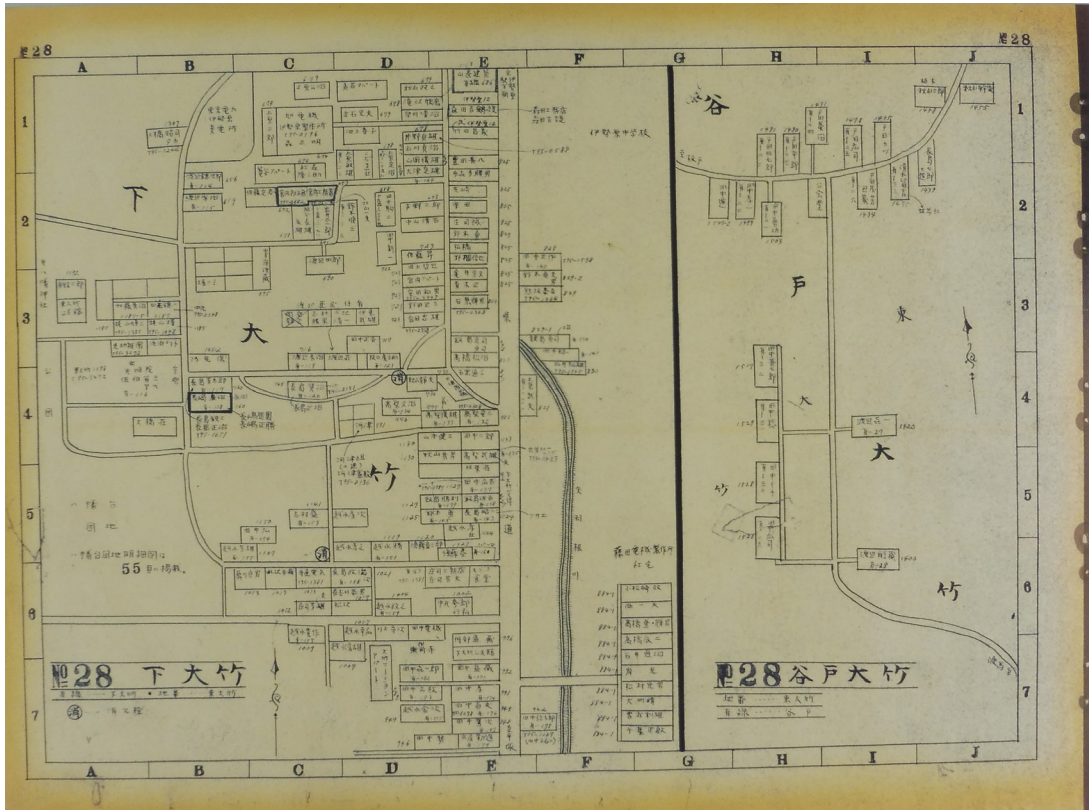


写真2 28頁目(No28 下大竹地区の頁)

67頁目以降は付録とされ、「地勢と沿革・各種行政機構」「歴代村町長伝・歴代校長伝」「伊勢原ゆかりの人々」「受賞に輝く人々」「善意の人々（篤行者）」等々といった項目が並ぶ。総じて単なる地図というよりは当時の伊勢原町の様々な情報が凝縮されたガイド誌とでもいった風情である。

写真3は裏表紙の前、97頁目に置かれたいわゆる奥付に相当する頁である。この地図を編集・出版したのが茅ヶ崎市香川で「人物と伝記研究所」を主宰した可見正弘という人物であることがわかる。また既刊分として、小田原市、平塚市、藤沢市、大磯町、国府地区⁽⁵⁾、二宮町、橘町⁽⁶⁾、寒川町があげられている。現在までに大磯町・国府地区・寒川町のものを確認してい

「伊勢原町家屋名入地図」と可児正弘について

る(後述)。

ただこの頁は実は奥付ではない。発行年月ではなく「昭和41年6月調査」との年代表記や、既刊の箇所では伊勢原町版を「近刊」とする事から、地図の発行以前、おそらくは実地調査の際に配布したいわば地図作成・発行の趣意書を綴じ込んだものと思われる。というのも「研究費として¥2,000賛助の方にこの地図一冊贈呈します。」とあるように、賛助金を募りつつ調査・編集を行い、一定部数を作成し、賛助者等へ進呈するほかに販売も行ったものと思われるからである(7)。



写真3 97頁目(奥付相当の頁)

この推定を補強するのが、表紙や裏表紙、地図の欄外、さらには専用の頁を割いて膨大な数の商店や事業者の広告が掲載される点である。賛助金の対価として広告を掲載したものであろうが、当時の商業の様子を伝える貴重な記録資料でもあるということが出来る。

写真4は66頁目で地図の部分の最終頁に当たる。中央部から右側にかけて

て「発刊のことば」として

「本書刊行にあたり寄せられました役場当局の御好意に対しお礼申し上げます。又歳末事務多端の時にもかかわらず原図製作に御助力下さいました下記の方々に対し満腔の敬意と感謝の意を表します。」

と、伊勢原一区長 谷亀吉光氏以下のべ80名の区長・副区長が列挙されている。

これらの記述を総括すると、伊勢原町家屋名入地図は

- ・昭和41(1966)年の半ばに実地調査と広告掲載の対価として賛助金を募集。
- ・同年末頃に伊勢原町役場のバックアップの下、区長らの協力を得て地図の原図を製作。
- ・翌昭和42(1967)年に発行、賛助者へ贈呈、販売も行う。

といった経過をたどり製作・発行されたものと考えられるであろう。

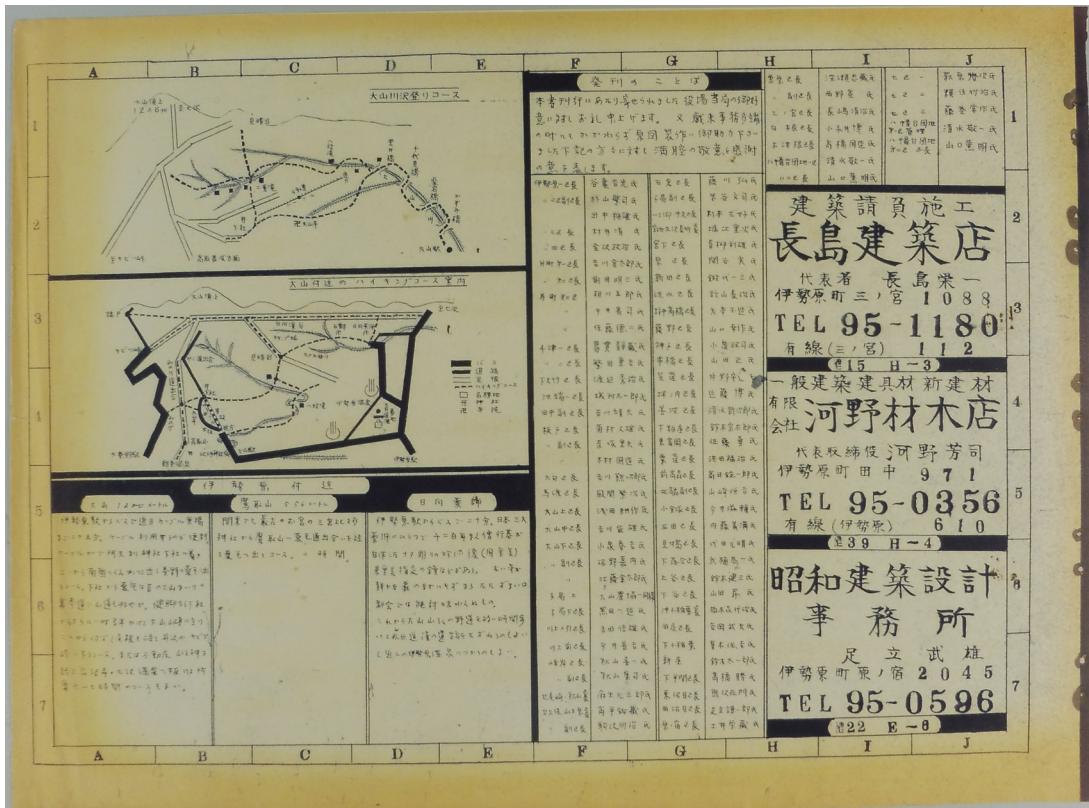


写真4 66頁目(発刊のことばの頁)

2 他の家屋名入地図

続いて、資料への理解を深めるために、確認された他の家屋名入地図について見てみたい。

①「最新 町会別 大磯町家屋名入地図」初版⁽⁸⁾

大磯町大磯の大磯町立図書館に所蔵。「上巻 旧大磯地区篇」として現在の大磯町の東部に当たる昭和29(1954)年の国府町との合併以前の旧大磯町域を収めており後述する②と一対になる存在である。明確な発行年等は記されないが、表紙に「各種団体役員名は昭和38年1月現在」とあるのでおおよその推定が出来よう。

なお、この①及び②は他の家屋名入地図のような奥付に相当する頁を確認していない。ただ表紙に記される所によると、発行したのは可児の主宰する人物と伝記研究所ではなく、藤沢の日本産業地図社となっている。藤沢で地図といえば、長年神奈川県域で愛用され、先年惜しくも経営者の急逝により廃業された明細地図社が有名であるが、明細地図社は同社HPによると昭和33(1958)年には最初の地図を発行とされるのでひとまず別の会社と見られよう。

明細地図社と日本産業地図社の関係も興味を引かれる所であるが、可児の名は日本産業地図社の編集人として見えている。ただ、地図のフォーマットが他の家屋名入地図と変わらない事から、日本産業地図社の1社員というよりは、代表ないし社長的な立場にあったのではないだろうか。すなわち日本産業地図社→人物と伝記研究所という流れである。

さて、地図として収録されているのは西から大磯・西小磯・台町・茶屋町・南本町・南下町・北本町・北下町・神明町・山王町・長者町・東町といった当時の国鉄東海道線と国道1号線沿いの地域に限られ、町域北部の高麗山周辺等は収録されない。

この収録地域の偏頗の理由の一つとしてはあくまで住宅地図であるということなのであろう。またもう一つの理由としては町会の存在が指摘出来よう。たとえば西小磯地区については東西二つの町会にページが分けられるといっ

た具合に町会という単位が強く意識されているのである。このことは伊勢原町版で区長の協力を感謝するところが大きかったように、大磯版及び国府版の作成、殊に地図の原図作成に当たっては町会の協力を預かる部分が大きかった事が想像される。

なお、大磯町立図書館には表紙に「初版」の表記と「各種団体役員名は昭和38年1月現在」の注記を持たない「大磯町家屋名入地図」上巻も所蔵されている（以下初版との区別のために無印版と呼ぶこととする）⁽⁹⁾。初版と無印版、内容は同一なのかはたまた異なるのかと見ていくと、基本的な記載内容は同一であるが、表1のように掲載されている広告の数がかなり異なっている。広告の掲載取り下げが相次いで掲載数が減る可能性もあるだろうが、一般的には新しいものほど広告の掲載数は増えると考えられるべきであろう。とすると、無印版の方が古く、初版の方が新しいという、一般的な感覚とは逆転状態を呈している事になる。

このように可児の著作物の書誌情報については曖昧な部分が多く見られ、資料の年代比定なども慎重を期す必要がある。

表1 「大磯町家屋名入地図」の広告掲載数の比較

	10頁	12頁	14頁	16頁	18頁	20頁	22頁	24頁
無印版 (130090210)	7	2	10	1	4	6	0	7
初版 (130005937)	9	14	16	15	10	14	2	24
	26頁	28頁	30頁	32頁	34頁	36頁	38頁	
無印版 (130090210)	3	6	0	1	1	0	1	
初版 (130005937)	13	11	16	10	10	3	15	

②「最新 町会別 大磯町家屋名入地図」

①と同じく大磯町立図書館所蔵⁽¹⁰⁾。「下巻 旧国府地区篇」として現在の大磯町の西部に当たる旧国府町域を収めている。掲載地域は国府・国府新宿・中丸・馬場・月京・生沢・寺坂・虫窪・黒岩・西久保と旧国府町域がほぼカバーされているが、やはり鷹取山周辺等は省かれている。

基本的な体裁は他の家屋名入地図と変わらないが、①共々書き込みが多数

見受けられるのが気になる所である。というのもいわゆる落書きや地図の利用に際した書き込み然としたものではなく、掲載情報の更新や校正をしているようなものが多いのである。ちなみに可児は発行当時大磯町内の東小磯に居住していた。あるいは第二版の刊行等を視野に入れて加筆修正を行っていた可児の旧蔵本が、何らかの経緯で図書館の所蔵になった可能性も考えられるのではないだろうか⁽¹¹⁾。

③寒川町家屋名入地図

寒川町宮山の寒川文書館に寄贈されている三枝芳一家資料及び藤井初男家資料にそれぞれ1点所蔵されており、いずれも昭和40(1965)年8月の年代表記を持つ⁽¹²⁾2版である。

基本的な体裁はやはり他の家屋名入地図と同様であるが、寒川町版の特徴としては、多くの頁で余白に膨大な地域の情報がびっしりと書き込まれている点がある。地域の人物紹介や史跡の解説といったガイド的な内容にはじまり、果ては地域を詠み込んだ俳句や短歌がまるで余白を残すのを嫌ったが如く細かい字で書き込まれている。この点は他の家屋名入地図と大きく異なる点である。

ここで考えてみたいのは、現在確認している上述の特徴を持つ寒川町版は2版であるという点である。初版(あるいは大磯に倣うなら無印版も存在するか)を確認してみない事にはあくまで想像でしかないが、おそらく寒川町版も初版は他と同様、比較的余白の目立つものだったのではないだろうか。そして初版の発行以降に寄せられた情報を盛り込んだ結果、2版は地域情報の増埒とでも言うべき紙面になったという経過を推定したい。

なお寒川町版については「家屋名入地図」に関する目下唯一の先行研究である高木秀彰「〈資料紹介〉寒川町家屋名入地図」⁽¹³⁾があり参考になる。

3 可児正弘と地図製作の背景

地図製作者である可児正弘氏の経歴を知り得た限りで年表に仕立てたのが

表2である。具体的な項目が昭和36(1961)年～42(1967)年にかけての家屋名入地図の時期と同40年代半ばの数年しか無い甚だ不十分なものであるが、その40年代半ば、可児は今度は市制施行した伊勢原・座間・南足柄の各自治体⁽¹⁴⁾の記念誌の編集者として姿を見せるのである。

表2 可児正弘年表

	事項	年	西暦	月	日	典拠
1	早稲田大学政経学部を卒業	昭和7年	1932			寒川町家屋名入地図(二版)奥付相当頁
2	大磯町家屋名入地図を発行カ 大磯町東小磯に居住 日本産業地図社(藤沢市本町3-1865 藤沢青写真別室)に勤務カ	昭和36年	1961			大磯町家屋名入地図 上巻 表紙
3	寒川町を調査	昭和40年	1965	8月		寒川町家屋名入地図(二版)奥付相当頁
4	伊勢原町を調査	昭和41年	1966	6月		伊勢原町家屋名入地図奥付相当頁
5	区長等協力のもと伊勢原版の原図を製作カ	昭和41年	1966	12月		伊勢原町家屋名入地図発刊のことば
6	寒川町家屋名入地図(二版)を発行カ	昭和41年	1966			寒川町家屋名入地図(二版)
7	茅ヶ崎市香川に居住 人物と伝記研究所(事務所:平塚市新宿1198 おもとや内)を主催カ	昭和41年	1966			寒川町家屋名入地図(二版)奥付相当頁
8	伊勢原町家屋名入地図を発行カ	昭和42年	1967			伊勢原町家屋名入地図
9	『市制記念伊勢原市 ALBUM』を企画・編集・発行	昭和46年	1971	3月	1日※	『市制記念伊勢原市 ALBUM』奥付
10	『市制記念座間市 ALBUM』を企画編集・発行	昭和46年	1971	11月	1日※	『市制記念座間市 ALBUM』奥付
11	『南足柄市制記念誌』を企画編集・発行	昭和47年	1972	4月	1日※	『南足柄市制記念誌』奥付

※発行日として記されているのはそれぞれの市制施行の日付であるが、当日の記念式典の写真や、伊勢原市については同年10月に開催された道灌祭の写真が掲載される事から実際の発行日はもう少し後であろうと思われる。

南足柄市制記念誌のあとがきに「作成にあたり、賛助広告をお寄せ下さいました諸会社、並びに何かと御言を賜りました御当局、印刷関係諸会社の献身的御助力に対し厚くお礼申し上げます。」との言を記している可児は、こ

ここでは人物と伝記研究所は名乗っていないが、賛助広告を多数掲載するというスタイルはまさに家屋名入地図と同様のものである。いずれも役場当局とのつながりをほのめかしている事から、半ば請け負うような形でこの種の仕事を広く手がけていたのかもしれない。

昭和7(1932)年に大学卒業とする所から昭和40年代の後半、市制記念誌の時期にはおそらく還暦を迎えたものと考えられる。すると現在知られる可児の仕事のほとんどは50代以降でのものということになるだろうか。

55歳定年の当時であっては老境に足を踏み入れつつあったであろう可児をこれらの仕事に駆り立てたものはなんだったのか、その一端を伺い知れるのが再度の写真3である。ここで可児は自らが主宰する人物と伝記研究所の目的として

- イ．あらゆる古先賢の遺徳顕彰
- ロ．かくれた人物の探求
- ハ．青少年の思想善導

の3つを掲げ、併せて事業として

- イ．文献の収集と保存
- ロ．顕彰館の設置

を挙げている。さらには私の計画として「日清・日露・大東亜戦争の戦没者および殉職者・町功労者の肖像画を展示する(仮称)伊勢原顕彰館の建設」を謳っている。そして「展示する肖像画はすべて無料で揮毫します。」とのことである。言ってみれば人物主義に基づいた自治体史の編纂と郷土資料館の設立及び肖像画の揮毫を独りで行おうというようなものである。あまりに気宇壮大な計画過ぎて目眩を覚えるほどである。

可児をここまで奮い立たせたものはなんだったのか。掲げられた計画で結実したのも残されていない現在にあってはわからない。あるいはそれは可児の前半生に隠されているのかもしれない。

- ただ、昭和40年頃といえば伊勢原町は、
- ・ 県の住宅公社が八幡台団地を造成

- ・ 国道271号線(小田原厚木道路)の完成が間近
- ・ 県の企業庁による内陸伊勢原工業団地の造成工事が着工

といった中で従来の純農村的なあり方からの変貌を遂げつつあった時期である。

表3 伊勢原町の人口の推移

	人口	男	女	世帯数
昭和 35(1960) 年	26,984	13,526	13,458	4,990
昭和 40(1965) 年	32,013	16,214	15,799	6,687
昭和 45(1970) 年	61,616	31,320	32,296	16,937

※『昭和40年国勢調査全国都道府県市区町村人口総覧 都道府県の部その14 神奈川県』総理府統計局 昭和41年 および『昭和50年国勢調査報告第3巻 その14 神奈川県』総理府統計局 昭和52年 を参照して作成した。

表3は伊勢原町の人口の推移を示したものである。昭和35(1960)年の国勢調査では26,984人であった人口は同40(1965)年の国勢調査では32,013人、同45(1970)年の国勢調査では61,616人と急増した。

これは独り伊勢原町に限らず、家屋名入地図が製作された県央～県西部の自治体に共通する傾向であったと思われる。そうした変化の波の中で可児は、伝統的な「まち」の姿を記録し、急増した新たな住人へも伝えるべく一連の地図を制作したのかもしれない。

まとめに代えて

筆者の家で伊勢原町家屋名入地図が「発見」されたのは、平成29(2017)年の引越しの際であった。本来であればこうした資料紹介のようなものを早急に書きたかったのであるが、資料保存機関職員の端くれとして、資料に関して自分で一定の知見を得てから公表したいと思っているうちにズルズルと年月が過ぎてしまった。

以前から存在を知っていた寒川町版以外の類例を求めたところ、大磯版と国府版の存在を確認したものの、その他については未だに確認出来ない。それらの発掘(文中で指摘した版による相違の問題も含めて)や製作

者である可児についての掘り下げも甚だ不十分である。ただ既に発行から半世紀以上が経過した資料ということもあり、捗々しい成果はなかなか得られない⁽¹⁵⁾。そこで、手持ちの情報を公表することで関連情報が寄せられることに期待する次第である。もし関連する情報や資料をお持ちの場合はぜひご教示願いたい⁽¹⁶⁾。

【注】

- (1) 実際、伊勢原市田中在住の成田氏宅より発見されたことが『タウンニュース』伊勢原版 2019年10月1日号に掲載されている。ただし、本来地図はより新しく正確なものが好まれるという点を踏まえると、残存する数は決して多くないのかも知れない。
- (2) 表紙・裏表紙含む。なお資料には細かくノズルが振られていない箇所もあるため、以下表紙頁を1頁目とし、何頁目と表記する。
- (3) 図1に「自動式電話開局記念」とあるように、伊勢原町での電話の自動化は電報電話局が竣工した昭和40(1965)年12月のことであり、当時商店や事業者を除くと電話の普及率は未だ高くない。多くの個人宅に記されているのはいわゆる農業協同組合(現JA)の有線放送電話の番号である。
- (4) 広告には「No25 I-6」といった具合に地図頁での掲載箇所が示されている。また広告はサイズが一樣では無いことから賛助金の多寡によりサイズの大小があると思われる。地図頁では広告主は太線で囲われ強調されている。
- (5) 国府町は神奈川県中郡に存在した町。昭和29(1954)年に隣接する大磯町と合併し現在の大磯町が発足した。大磯町を敢えて大磯と旧国府町域に分けていることは、家屋名入地図が企画・発行された市・町の偏頗と併せて気になる所である。
- (6) 神奈川県足柄下郡に存在した町。昭和46(1971)年に隣接する小田原市と合併した。

- (7) 写真3の既刊の箇所の下には小さな字で「取扱店 近郊有名書店 伊勢原では五邦不動産(駅前踏切キワ)」との記述が見られる。筆者の家も広告を掲載しているわけではないため、購入したものと思われる。なお、伊勢原町での取扱店＝販売所が不動産業者であることは、家屋名入地図が不動産業に関する基礎資料としての性格も持っていたことを示しているよう。
- (8) 資料コード130005937。
- (9) 資料コード130090210。表紙には「謹呈豊田様 東小磯一〇七 可児正弘」とあり、可児から豊田氏(広告主か)に謹呈されたものであった事がわかる。
- (10) 資料コード1300005945、130090228の2点が所蔵される。なお記載内容以外の文中に記した資料の特徴はあくまで130005945のものであるが、①について指摘したような初版と無印版といった違いは無く、広告の掲載数も変わらなかった。
- (11) 以前大磯町図書館にかがった所では、昔の事過ぎて収蔵の経緯等は不明とのことであった。
- (12) 年代の表記としては「昭和40年8月調査」であり、伊勢原町版で指摘したように実際の発行時期とは時間差があると思われる。
- (13) (『寒川文書館だより』21号 寒川文書館 2017年3月)
- (14) 同時期に海老名も市制施行しており(昭和46<1971>年11月1日)、その記念誌も手がけたのではないかと想像されるのだが、未発見である。
- (15) 伊勢原町版で広告主として見える名前はその多くが筆者の父(昭和16<1941>年生)ではなく明治末生まれの祖父と同世代の人物である。昭和40年頃というと祖父の世代がまだ現役で、賛助の可否といった事も決定権を持っていたと思われる。試みに地図のコピーを行きつけの店の主に頼んで預け、「古くから地元にいるお客さんに見せて、何か情報が得られたら教えて」と情報を募ったのだが、昔話に花が咲くことはあっても、家屋名入地図に関する情報が寄せられる事は無かった。調べるには

「伊勢原町家屋名入地図」と可児正弘について

遅すぎたのであろう。

- (16) なお「伊勢原町家屋名入地図」については神奈川県立公文書館に寄贈する事になっている。